

## 校異源氏物語・よこ笛

こ権大納言のはかなくうせ給にしかなしさをあかすくちおしき物にこひしのひ給ひとおほかり六条の院にもおほかたにつけてたよにめやすき人のなくなるをはおしみ給御心にましてこれはあさ夕にしたしくまいりなれつゝ人よりも御心とゝめおほしたりしかはいかにそやおほしいつることは有なからあはれはおくおりくにつけてしのひ給御はてにもす経なとゝりわきせさせ給ふよろつもしらすかほにいはいけなき御有さまをみ給ふにもさすかにいみしくあはれなれは御心のうちに又心さしたまふてこかね百りやうをなむへちにせさせ給ひけるおとゝは心もしらてそかしこまりよろこひきこえさせ給ふ大将の君もことゝもおほくし給とりもちてねんころにいとなみ給ふかの一てうの宮をもこの程の御心さしふかくとふらひきこえ給ふはらからの君たちよりもまさりたる御心のほとをいとかくは思きこえさりきとおとゝうへもよろこひきこえ給なきあとにもよのおほえをもくものし給けるほどのみゆるにいみしうあたらしうのみおほしこかるゝことつきせずやまのみかとは二の宮もかく人わらはれるやうにてなかめ給也入道の宮もこのよの人めかしきかたはかけはなれ給ひぬれはさまくにあかすおほさるれとすへてこのよをおほしなやましとしのひ給御をこなひの程にもおなし道をこそはつとめ給らめなとおほしやりてかゝるさまになりたまて後はゝかなきことにつけてもたえすきこえ給御てらのかたはらちかきはやしにぬきいてたるたかうなそのわたりのやまにほれる所などの山さにつけてはあはれなれはたてまつれ給とて御ふみこまやかなるはしにはるの野山かすみもたとくしけれと心さしふかくほりいてさせて侍るしはかりになむよをわかれいりなむみちはをくるともおなしところを君もたつねよいとかたきわさになむあるときこえ給へるを涙くみてみ給ほとにおとゝの君わたり給へり例ならす御まへちかきらいしとをなそあやしと御覧するに院の御ふみ成けりみ給へはいとあはれなりけふかあすかの心ちするをたいめんの心になはぬことなとこまやかにかゝせ給へりこのおなし所の御ともなひをことにおかしきふしもなきひしりことはなれとけにさそおほすらむかしわれさへをろかなるさまにみえたてまつりていとゝうしろめたき御おもひのそふへかめるをいと

くおしとおほす御かへりつゝましけにかき給て御つかひにはあをにひのあや  
一かさねたまふかきかへ給へりけるかみのみ木ちやうのそはよりほのみゆるを  
とりてみ給へは御てはいとはかなけにて

うき世にはあらぬところのゆかしくてそむく山ちに思ひこそいれうしろめ

たけなる御けしきなるにこのあらぬところもとめ給へるいとうたて心うしとき  
こえ給今はまほにもみえたてまつり給はすいとうつくしうらうたけなる御ひた  
ひかみつらつきのおかしきたゝちこのやうにみえ給ていみしうらうたきをみた  
てまつりたまふにつけてはなとかうはなりにしことそとつみえぬへくおほさる  
れは御木ちやうはかりへたてゝ又いとこよなうけとをくうとうしうはあらぬ  
程にもてなしきこえてそおはしけるわか君はめのものもとにね給へりけるおき  
てはひいて給て御袖をひきまつはれたてまつり給さまいとうつくしゝろきうす  
ものからのこものこうはいの御そのすそいとなくしとけなけにひきやら  
れて御身はいとあらはにてうしろのかきりにきなし給へるさまは例のことなれ  
といとらうたけにしろくそひやかにやなきをけつりてつくりたらむやうなりか  
しらはつゆくさしてことさらに色とりたらむ心ちしてくちつきうつくしうにほ  
ひまみのひらかにはつかしうかほりたるなどはなをいよく思ひいてらるれと  
かれはいとかやうにきはゝなれたるきよりはなかりし物をいかてかゝらん宮に  
もにたてまつらす今よりけたかくものくゝしうさまことにみえ給へるけしきな  
とはわか御かゝみのかけにもにけなからすみなされ給ふわつかにあゆみなとし  
給ほとなりこのたかうなのらいしになにともしらすたちよりていとあはたゝし  
うとりちらしてくひかなくりなとし給へはあならうかはしやいとふひんなりか  
れとりかくせくひ物にめとゝめ給ふともいひさかなき女はうもこそいひなせ  
とてわらひ給かきいたき給て此君のまみのいとけしき有かなちいさきほどのち  
こをあまたみねはにやあらむかはかりのほとはたゝいはけなきものとのみゝし  
を今よりいとけはひことなるこそわつらはしけれ女宮ものし給めるあたりにか  
ゝるひとおひいてゝ心くるしきことたかためにもありなむかしあはれそのをの  
くのおい行すゑまてはみはてんとすらむやは花のさかりはありなめとうちま  
もりきこえたまふうたてゆゝしき御ことにもと人ゝはきこゆ御はのおいゝつる  
にくひあてむとてたかうなをつとにきりもちてしつくもよゝとくひぬらし給へ  
はいとねちけたる色このみかなとて

うきふしもわすれすなからくれ竹のこはすてかたき物にそありけるとゐて

はなちての給かくれとうちわらひてなにもおもひたらしいとそゝかしうはひ

おりさはき給月日にそへて此君のうつくしうゆゝしきまでおいまさり給にまことこのうきふしみなおほしわすれぬへし此人のいてもし給へき契にてさるおもひの外のこともあるにこそはありけめのかれかたかなるわさそかしとすこしはおほしなをさる身つからの御すくせもなをあかぬことおほかりあまたつとへ給へるなかにも此宮こそはかたほなるおもひましらす人の御有さまもおもふにあかぬところなくて物し給ふへきをかくおもはさりしさまにてみたてまつることゝおほすにつけてなむすきにしつみゆるしかたく猶くちおしかりける大將の君はかのいまはのとちめにとゝめし一ことを心ひとつにおもひいてつゝいかなりしことそとはいときこえまほしう御けしきもゆかしきをほの心えておもひよらるゝこともあれはなかなかうちいてゝきこえんもかたはらいたくていかならむつゐてにこのことのくはしき有さまもあきらめ又かの人の思ひいたりしさまをもきこしめさせむとおもひわたり給秋の夕のものあはれなるに一条の宮をおもひやりきこえ給てわたり給へりうちとけしめやかに御ことゝもなどひき給ふほとなるへしふかくもえとりやらてやかてその南のひさしにいたてまつり給へりはしつかたなりける人のいさりいりつるけはひともしるくきぬのをとなひもおほかたのにほひかうはしく心にくき程なり例のみやす所たいめんし給てむかしの物かたりともきこえかはし給わか御殿のあけくれ人しけて物さはかしくをさなき君たちなどすたきあわて給ふにならひ給ていとしつかに物あはれ也うちあれたる心ちすれとあてにけたかくすみなし給てせむさいの花ともむしのねしけきのへとみたれたる夕はへをみわたし給わこんをひきよせ給へれはりちにしらへられていとよくひきならしたるひとかにしみてなつかしうおほゆかやうなるあたりにおもひのまゝなるすき心ある人はしつむることなくてさまあしきけはひをもあらはしさるましきなをもたつるそかしなとおもひつゝけつゝかきならし給ふこきみのつねにひき給ひしことなりけりおかしきてひとつなとすこしひき給てあはれいとめつらかなるねにかきならし給しはやこの御ことにもこもりて侍らんかしうけたまはりあらはしてしかなの給へはことのをたえにしのちよりむかしの御わらはあそひのなこりをたにおもひいてたまはすなんなりにて侍へめる院のおまへにて女宮たちのとりくゝの御ことゝも心みきこえ給しにもかやうのかたはおほめかしからすものし給となむさためきこえ給ふめりしをあらぬさまにほれゝしうなりてなかめすくし給めれば世のうきつまにといふやうになむみ給るときこえ給へはいとことほりの御おもひなりやかきりたにあるとうちなかめてことはおしやり給へれはかれなをさらはこゑにつた

はることもやとき、わくはかりならさせ給へものむつかしうおもふたまへしつめるみ、をたにあきらめ侍らんとときこえ給をしかつたはる中のをはことにこそは侍らめそれをこそうけたまはらむとはきこえつれとてみすのもとちかくおしよせ給へと、みにしもうけひき給ふましきことなれはしいてもきこえ給はす月さしいて、くもりなき空にはねうちかはすかりかねもつらをはなれぬうらやましくき、給ふらんかし風はたさむくものあはれなるにさそはれてさうのことをいとほのかにかきならし給へるもおくふかきこゑなるにいと、心とまりはて、中／＼におもほゆれはひわをとりよせていとなつかしきねにさうふれんをひき給おもひをよひかほなるはかたはらいたけれとこれはこと、はせ給へくやとてせちにすのうちをそ、のかしきこえ給へとましてつ、ましきさしいらへなれは宮はた、物をのみあはれとおほしつ、けたるに

ことにいて、いはぬもいふにまさるとは人にはちたるけしきをそみるとき

こえ給にた、すゑつかたをいさ、かひき給ふ

ふかきよのあはれはかりはき、わけとことよりかほにえやはひきけるあか

すおかしき程にさるおほとかなるもの、ねからにふるき人の心しめてひきつたへけるおなし、らへのものといへとあはれに心すききもの、かたはしをかきならしてやみ給ぬれはうらめしきまておほゆれとすき／＼しさをさま／＼にひきいてても御らむせられぬるかな秋のよふかし侍らんもむかしのとかめやとは、かりてなむまかて侍ぬへかめる又ことさらに心してなむさふらふへきをこの御こと、ものしらへかへすまたせたまはんやひきたかふることも侍ぬへきよなれはうしろめたくこそなとまおにはあらねとうちにほはしをきていて給こよひの御すきには人ゆるしきこえつへくなむありけるそこはかとなきいにしへかたりのにのみまきはさせ給てたまのをにせむ心ちもし侍らぬのこりおほくなんとて御をくり物にふえをそへてたてまつり給ふこれになむまことにふるきこともつたはるへくき、をき侍しをか、るよもきふにうつもる、もあはれにみ給ふるを御さきにきをはんこゑなむよそなからいふかしう侍るときこえ給へはにつかはしからぬすいしんにこそは侍へけれとてみ給ふにこれもけによと、もに身にそへてもてあそひつ、身つからもさらにこれかねのかきりはえふきとおさすおもはん人にいかてつたへてしかなとおり／＼きこえこち給しを思ひいて給ふに今すこしあはれおほくそひて心みにふきならすはんしきてうのなからはかりふきさしてむかしをしのふひとりことはさてもつみゆるされ侍りけりこれはまはゆくなむとていて給ふに

露しけきむくらのやとにいにしへの秋にかはらぬむしのこゑかなときこえ  
いたしたまへり

よこふえのしらへはことにかはらぬをむなしくなりしねこそつきせねいて  
かてにやすらひ給ふに夜もいたくふけにけり殿にかへり給へれはかうしなとお  
ろさせてみなね給にけりこの宮に心かけきこえ給てかくねんころかりきこえ給  
そなど人のきこえしらせければかやうによふかし給ふもなまにくゝていり給ふ  
をもきくゝねたるやうにてもなし給なるへしいもとわれといささの山のどこ  
ゑはいとおかしうてひとりこちうたひてこはなとかくさしかためたるあなむも  
れやこよひの月をみぬさとも有けりとうめき給ふかうしあけさせ給てみすまき  
あけなとし給てはしちかくふし給へりかゝる夜の月に心やすくゆめみる人はあ  
るものかすこしいて給へあな心うなときこえ給へと心やましうゝちおもひてき  
ゝ忍ひ給君たちのいはけなくねをひれたるけはひなとこゝかしこにうちして女  
はうもさしこみてふしたる人けにきはゝしきに有つところのありさまおもひ  
あはするにおほくかはりたりこのふえをうちふき給ひつゝいかななりもなか  
め給らん御ことゝもはしらへかはらすあそひたまふらむかし宮す所もわこんの  
上すそかしなとおもひやりてふし給へりいかなれはこきみたゝおほかたの心は  
へはやむことなくもてなしきこえなからいとふかきけしきなかりけむとそれに  
つけてもいといふかしうおほゆみをとりせむこそいとゝおしかるへけれ大か  
たのよにつけてもかきりなくきくことはかならずさそあるかしなとおもふにわ  
か御なかのうちけしきはみたるおもひやりもなくてむつひそめたるとし月の程  
をかそふるにあはれにいかうおしたちてをこりならひ給へるもことはりにお  
ほえ給けりすこしねいり給へる夢に彼ゑもんのかみたゝありしさまのうちきす  
かたにてかたはらにゐて此ふえをとりてみるゆめのうちにもなき人のわつらは  
しうこのこゑをたつねてきたるとおもふに

笛たけにふきよる風のことはすゑのよなかきねにつたへなむおもふか

たことに侍りきといふをとほととおもふほどにわか君のねをひれてなき給ふ御  
こゑに覺給ぬ此君いたくなき給てつたみなとし給へはめのともおきさはきうへ  
も御となふらちかくとりよせさせたまでみゝはさみしてそゝくりつくるひてい  
たきてゐ給へりいとよくこえてつふゝとおかしけなるむねをあけてちなとく  
ゝめ給ちこもいとうつくしうおはする君なれはしろくおかしけなるに御ちはい  
とかはらかなるを心をやりてなくさめ給ふおとこ君もよりおはしていかなるそ  
などの給ふうちまきしちらしなとしてみたりかはしきに夢のあはれもまきれぬ

へしなやましけにこそみゆれいまめかしき御有さまの程にあくかれたまうてよ  
ふかき御月めてにかうしもあけられたれは例のものゝけのいりきたるなめりな  
といとわかくおかしきかほしてかこち給へはうちわらひてあやしのものゝけの  
しるへやまろかうしあけすはみちなくてけにえいりこさらましあまたの人のお  
やになり給ふまゝに思いたりふかく物をこそ給なりにたれとてうちみやり給  
へるまみのいとはつかしけなれはさすがに物もの給はていてたまひねみくるし  
とてあきらかなるほかけをさすかにはち給へるさまもにくからすまことに此君  
なつみてなきむつかりあかし給つ大将のきみもゆめおほしいつるに此ふえのわ  
つらはしくもあるかな人の心とゝめておもへりしものゝゆくへきかたにもあら  
す女の御つたへはかひなきをやいかゝおもひつらんこの世にてかすにおもひい  
れぬこともかのいまはのとちめに一ねむのうらめしきもゝしはあはれとも思に  
まつはれてこそはなかきよのやみにもまとふわさなゝれかゝれはこそはなにこ  
とにもしふはとゝめしとおもふよなれなとおほしつゝけてをたきにす経せさせ  
給ふ又かの心よせのてらにもせさせ給て此ふえをはわさと人のさるゆへふかき  
物にてひきいて給へりしをたちまちにほとけの道におもむけんもたうときこと  
ゝはいひなからあへなかるへしと思て六条の院にまいり給ぬ女御の御方におは  
しますほと成けり三宮みつばかりにてなかにうつくしくをはするをこなたにそ  
又とりわきておはしますさせ給けるはしりいて給て大将こそ宮いたき奉りてあな  
たへゐておはせと身つからかしこまりていとしとけなけにの給へはうちわらひ  
ておはしませいかてかみすのまへをはわたり侍らんときやうゝならむとて  
いたきたてまつりてゐる給へれは人もみすまろかほはかくさむなをゝとて御袖  
してさしかくし給へはいとうつくしうていてたてまつり給ふこなたにも二宮の  
わか君とひとつにましりてあそび給ふうつくしみておはします成けりすみのま  
のほどにおろし奉り給を二宮みつけ給てまろも大将にいたかれんとの給を三宮  
あか大将をやとてひかへ給へり院も御覽していとみたりかはしき御有さまとも  
かなおほやけの御ちかきまもりをわたくしのすいしんにりやうせむとあらそひ  
給よ三宮こそいとさかなくおはすれつねにこのかみにきほひまうし給ふといさ  
めきこえあつかひ給ふ大将もわらひて二宮はこよなくこのかみ心にところさり  
きこえ給ふ御心ふかくなむおはしますめる御としのほどよりはおそろしきまで  
みえさせ給ふなときこえ給ふうちゑみていつれもいとうつくしとおもひきこえ  
させ給へりみくるしくかるかるしき公卿のみさなりあなたにこそとてわたり給  
はむとするに宮たちまつはれてさらにはなれ給はす宮のわか君は宮たちの御つ

らには有ましきそかしと御心のうちにおほせと中くその御心はへをは、宮の御心のおに、やおもひよせ給らんとこれも心のくせにいとおしうおほさるれはいとらうたきものにおもひかしつき、こえ給大将は此君をまたえよくもみぬかなとおほしてみすのひまよりさしいて給へるにはなのえたのかれておちたるをとりてみせたてまつりてまねき給へは、しりおはしたりふたあるのをしのかきりをきていみしうしろひかりうつくしきことみこたちよりもこまかにおかしけにてつふくときよらなりなまめとまるところもそひてみれはにやまなこゑなどこれは今すこしつようかとあるさま、さりたれとましりのとちめおかしうかをれるけしきなといとよくおほえ給へりくちつきのことさらにはなやかなるさましてうちゑみたるなとわかめのうちつけなるにやあらむおと、はかならすおほしやすらんといよく御けしきゆかし宮たちはおもひなしこそけたかけれよのつねのうつくしききこともとみえ給ふにこの君はいとあてなるものからさまことにおかしけなるをみくらへたてまつりつゝいてあはれもうたかふゆへもまことならはち、おと、のさはかりよにいみしくおもひほれたまてことなのりいてくる人たになきことかたみにみるはかりのなこりをたにと、めよかしとなきこかれ給ふにきかせたてまつらさむつみえかましきなどおもふもいいていかてさはあるへきことと猶心えすおもひよるかたなし心はへさへなつかしうあはれにてむつれあそひたまへはいとらうたくおほゆたいへわたり給ぬれはのとやかに御ものかたりなときこえておはするほとに曰くれか、りぬよへかの一条の宮にまうてたりしにおはせし有さまなときこえて給へるをほ、ゑみてき、おはすあはれなるむかしのことか、りたるふしくはあへしらひなどし給ふにかのさうふれんの心はへはけにいにしへのためしにもひきいてつへかりけるおりなから女はなを人の心うつるはかりのゆへよしをもおほろけにてはもらすましうこそありけれとおもひしらるゝことゝもこそおほかれすきにしかたのこゝろさしをわすれすくなきよういを人にしられぬとならはおなしうは心きよくてとかくかゝつらひゆかしけなきみたれなからむやたかためも心にくゝめやすかるへきことならむとなんおもふとの給へはさかし人のうへの御をしへはかりは心つよけにてかゝるすきはいてやとみたてまつり給ふなにのみたれか侍らむ猶つねならぬよのあはれをかけそめ侍りにしあたりに心みしかく侍らんこそなか／＼よのつねのけんきありかほにはへらめとてこそさうふれんはこゝろとさしすきてことゝいて給はんやにくきことに侍らましものゝついでにほのかなりしはおりからのよしつきておかしうなむ侍しなにととも人によりことにし

たかふわさにこそ侍るへかめれよはひなともやうくいたうわかひ給ふへきほとにも、のし給はす又あされかましうすきくしきけしきなどに物なれなともし侍らぬにうちとけ給にやおほかたなつかしうめやすき人の御有さまになむものし給けるなときこえ給ふにいとよきついてつくりいて、すこしちかくまいりより給てかの夢かたりをきこえ給へはとみにもの給はてきこしめしておほしあはすることもありそのふえはこゝにみるへきゆへある物なりかれはやうせい院の御ふえなりそれをこしきふ卿の宮のいみしきものにし給けるをかのゑもんのかみはわらはよりいとことなるねをふきいてしにかんしてかの宮のはきのえんせられける日をくり物にとらせ給へるなり女の心はふかくもととりしらすしかものしたるなゝりなどの給てすゑのよのつたへまたいつかたにとかは思ひまかへんさやうにおもふなりけんかしなとおほしてこのきみもいいたりふかき人なれは思ひよることあらむかしとおほすその御けしきをみるにいとゝはゝかりてとみにもうちいてきこえ給はねとせめてきかしたてまつらんのこゝろあれはいましもことのついでに思ひいてたるやうにおほめかしうもてなしていまはとせしほとにもとふらひにまかりて侍しになからむのちのことゝもいひをき侍し中にしかくなんふかくかしこまり申よしを返すものし侍しかはいかなることにか侍りけむいまにそのゆへをなんえおもひ給へより侍らねはおほつかなく侍るといとたどくしけにきこえ給にされはよとおほせとなにかはそのほとけの事あらはしの給へきならねはしはおほめかしくてしか人のうらみとまるはかりのけしきはなにのついでにかはもりいてけんと身つからもえおもひいてすなむさていましつかにかの夢はおもひあはせてなむきこゆへきよるかたらずとか女はうのつたへにいふなりとの給ておさおさ御いらへもなければうちいてきこえてけるをいかにおほすにかとつつましくおほしけりとそ